

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530572

研究課題名（和文）近世末期出産・出生指標の算出・評価研究 - 歴史人口学の精密化 -

研究課題名（英文）In search of closer and reasonable fertility rate; an attempt to use source materials other than population register in pre-modern Japan.

研究代表者

高木 正朗（TAKAGI MASAO）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70118371

研究成果の概要（和文）：

この研究は江戸時代の普通出生率の正確な計算を目指した。しかし、東北大震災のため計画を修正、近世の80歳以上高齢者の実数と人口比を計算することにした。研究成果は以下の通り。(1) 嘉永2(1849)年の仙台藩庶民の(数え年)80歳以上者は2,615人(性比98.9)、人口10万人比で556人だった。(2) 岡山藩の元禄8(1695)年の武家の場合、80歳以上者は163人(性比81.1)だった(現代日本の80歳以上者は813万人〔性比94.8〕、人口10万人比6,349人)。(3) 幕末の仙台藩庶民は、封建的社会・経済体制からの解放、生活水準の向上を確信し、ようやく産児制限を解除(間引きを抑制)、人口増加(急増)に貢献した。

研究成果の概要（英文）：

How do we estimate birth rate or infant mortality rate which has been computed on the basis of such material as Shumon-aratame-cho or Ninbetu-arfatame-cho? This project was originally planned to get much closer rate than that of reported, but unfortunately the Higashi-Nihon earthquake (3.11) crushed it. So, the question was amended as this: How much population age at 80over in reality was during the Edo era? Results are as follows; 1) In 1849, peasant of the Sendai domain age at 80over was 2,615, and its sex ratio was 98.9. 2) In case of Samurai population in the Okayama domain, on the other hand, the aged classified into the same category was 163 persons at 1695 (sex ratio 81.1). Even in the pre modern society, does the Japanese female tend to enjoy much life expectancy than male? 3) Commoners in the Sendai domain cancelled abortion or infanticide when they firmly believed collapse of the Tokugawa-regime.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人口社会学

科研費の分科・細目：社会学、家族・親族・人口

キーワード：出産・出生、懐婦書上、育児支援、人口増加、人別帳、寿命、極老調査

1. 研究開始当初の背景

(1) 代表者(高木)は研究開始当初、次の疑問をもっていた。その疑問とは、日本の歴史人口学が算出・公表してきた江戸時代の人口学的指標、とりわけ出生率・死亡率は、当時の実態をどの程度まで正確に反映しているのか、ということである。

何故ならそこでは、宗門帳・人別帳だけが使用され、周辺資料の活用は限定的だったからである(この傾向は、現在も変わらない)。

(2) 人の出生と死亡は、人口学では最も重要かつ基本的なできごと(event)と位置づけられる。このうち死亡については、寺院がいまも書き継いでいる過去帳の中に前近代の帳面があって、われわれがその帳面を閲覧できるなら、個人の死亡を確認(死亡のダメ押し)することは論理的に可能である。

しかし、その場合であってもわれわれは、過去帳に登録された死者が人別帳では「死亡」していない、あるいは人別帳に見当たらないなど、齟齬・不一致をたびたび経験するのである。われわれは、どちらの記録を信用すべきか悩むわけである。

(3) 江戸時代の出生は人別帳・宗門帳では正確に押さえられない、換言すればその出生登録は過小であるという事実は、ながく日本の歴史人口学の隘路であった。この隘路は、木下[2002]の確率論的なシミュレーション結果(それは、人別帳記載の出生は、実際の出生より14~18%程度過小、というもの)によって、ある程度克服されたかに見える。しかしそれは、あくまで模擬的計算の結果であり、かつその比率の幅は決して小さくない。

(4) 人別帳「以外」の資料で出生を確認することは、死亡の特定以上に困難である。何故なら出生は、妊娠・出産・出生という一連のプロセス中の最後のeventだから、帳面(懐婦書上)の作成者に持続的観察を強いたからである。俗に言う「十月十日(とつきとうか)」という時間は決して短くはなく、また妊娠については(意図的あるいは過失による)申告漏れもあったから、記載漏れ・記憶違いが少なからずあったようである。

そこで、われわれが妊娠・出産eventの把握・確認をすることは、相当の困難がともなう。何故なら出産記録は、密かに墮胎が行われた場合(人工流産)であれ、またそうでな

い場合(自然流産)であれ、ともに「流産」と記載されたからである。さらに、記帳者(赤子制導役)の意図的な「目こぼし」がなかったとは言えない。

近世の出生をめぐるこの複雑な事態は、歴史人口学者をして「人別帳に搭載された赤子数をもって出生数とみなす。その場合、過小登録は従来の20%程度から16%前後に引き下げればよいのではないか」と、いう仮定・前提を共有させるに至った。

(5) しかし、例え事態は複雑であっても、妊娠・出産・出生のプロセスを克明に記した資料があれば、事態はある程度明らかにできる。高木・向田[2008]は、今のところこれ以上望むべくもないと推定される文書群を使用して、その過程と内容とを解明した典型例の一つである。その文書群とは人別帳、出減帳、御用留、懐婦書上、過去帳である。

しかし、われわれが一箇村(西磐井郡狐禅寺村)の事態を明らかにできたとしても、他の村では事情(数値)は違っていた可能性がある。

そこで筆者は本研究において、東日本(仙台領内の他村・地域)と西日本(津山藩領)における徹底的な資料発掘と整理を計画し、出産・出生指標の計算と評価とを目指した。

2. 研究の目的

研究目的は当初、以下の3点とした。

(1) 前近代(18世紀末~19世紀後期)の日本人の出産・出生に焦点を絞り、仙台藩の出産・出生資料、新規収集資料を活用して、出生・出産指標を算出・評価する。その算出値は、従来(前近代、近代、現代)の数値と比較対照するために活用する。

(2) 権力の人口減対策・出生促進策を、オリジナル資料に基づいて解明する。解明した事実は、現代日本の出産奨励・補助金制度あるいは育児支策と対比し、現代的課題への示唆を入手するために活用する。

(3) 両者(出生率と出生促進策と)を架橋・対比し、近世国家が実施した人口増加策の効果・効力を推定する。仮説は、前近代の補助対象はごく少数(の極貧層)だったゆえに出生増に結びつかず、現代の補助対象は(前近代に比して)格段に多数・多様だが出生増に必ずしも結びつかず、というものである。以上が、申請時における当初の目的である。

しかし、研究2年目(2010年度)の終盤(2011年3月11日)に、東日本大震災が勃発した。その結果、この研究が長時間かけて準備を重ねてきた出産関係資料一式の入手が困難となった。そこで急遽、最終(2011)年度の研究目的(と3年間の総括方法/内容)を変更(修正)し、以下とした。それは、現代のもう一つの人口問題：高齢社会における超高齢者の処遇法、孤独・孤立死の回避策、を念頭に置いた主題である。

(4) 近世末期の庶民の寿命・極老者資料の収集・解読・データ構築を行う。フィールドとして西日本(岡山藩)を加える。この目的に関わる資料収集を通じて、出産資料の新規発掘をも目指す。

3. 研究の方法

研究方法は一貫して、以下の4点である。

(1) 資料収集。

本研究は人口資料3セット(人口、出産・出生、死亡資料)を不可欠とする。具体的収集は、仙台藩(東日本)領内の村と寺院で、岡山藩(西日本)資料の収集は津山市内の所蔵先で行なう。同時に、質的史料(藩人別文書・育子文書、高齢者書上)の収集を計画。収集方法は、原資料・複写資料とも、資料所蔵先でのデジタルカメラによる資料撮影。

(2) データベース構築。

これは三つに区分する。すべての『市町村史』を検索、資料データベースを作成する。

資料翻刻データベースを作成する。撮影画像のプリント、PCビューワを用いた解読・点検。解読情報(原文、数値)のデータベース化作成(アプリケーションは、数値データはexcelを、文書データはword、一太郎を使用)。

(3) データベース分析。Excelのデータベース関数、wordのキーワード検索機能など使用。分析指標は人口学の概念を使用。

(4) 古文書翻刻。近世権力=大名が作成した人口施策文書の解読。緻密な解読方法を採用する理由は、以下の通り。数値データ(データベース分析結果)の信頼性は、検定(内在的検証)と同時に、質的データ(関連文書)による傍証(外在的検討)をまって、初めて確定しうる故。

4. 研究成果

研究成果は、研究目的(3)の末尾に記したように、(a) 予想外の大震災に遭遇し、筆者も現地で被災した、(b) 2009年度「計画調書」記入の補助申請額は約70%に圧縮されたので、結果的に極めて制限された内容となっ

た。そこでこの報告書は、主として研究目的(2)(4)に対応する成果を記す。

(1): 研究目的(2)に対応した成果。

『市町村史』資料データベース構築。

この目的は、研究フィールドにおける赤子養育資料の所在を徹底把握し、収集の手掛かりとすることである。そこで、研究フィールド内の自治体が発行した『県史、市町村史』を点検、45件(『資料目録』を除く)がヒットした。

このデータベースから、次の3点が判明。第1点：伝存する出産関係資料は意外に少ない、第2点：大部分の資料は19世紀(文化期以後)に作成された、第3点：17世紀末(元禄初期)の関心事は「捨て子」「嬰兒殺=間引き」の風習防止だった、などである。

第1の成果は(国内研究者は強調しなかったが)、育子支援は(対象人数も支給金穀も)極めて微弱だったので、体系的かつ持続的記録が行われなかった、ということである。

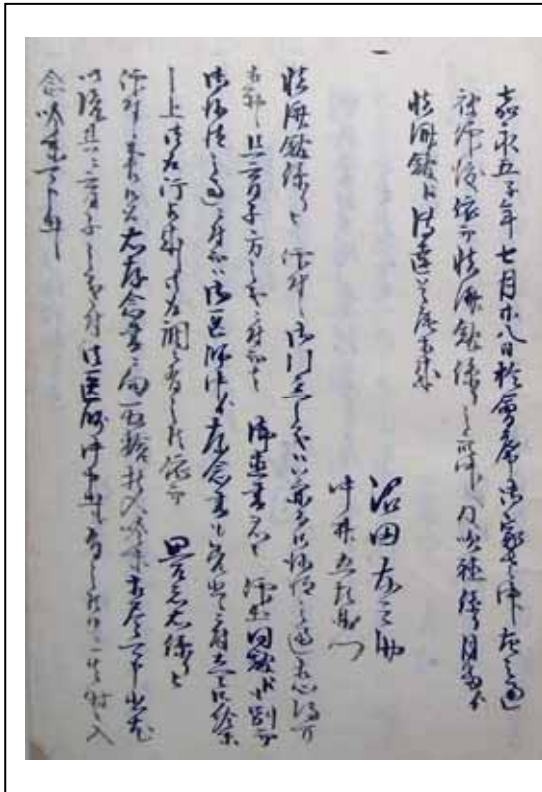
第2の成果は、国内の研究者は、出産・出生施策を藩人口趨勢と関連づける作業を怠ってきたので、説明ができなかった点と関わる。高木・新屋[2012]は、仙台領人口(40~55万人規模)の復元に基づいて、「権力(藩)は18世紀末以後、天明飢饉以後の微弱な人口回復軌跡、庶民の生活水準維持を目的とする産児制限を危機と認識し、打開策を講じた」と結論した。この結論は、国際的評価に十分値すると推定する(例えば、S.B. Hanley and K. Yamamura[1977]と比較)。

第3の成果も上記評価と同様である。元禄期(1688-1703年)は、直前の仙台領人口の急増がプラトー化(頭打ち)に転じる、まさに節目だった(高木・新屋[2008])。筆者の結論は、「この時期、権力の危機意識は薄かったと推定され、人口施策は過剰な出生制限の抑止のみに向けられた」ということである。

資料翻刻データベース構築。

翻刻対象は一関藩の嘉永5年「赤子養育方御用留」(仮題)である。

この文書は、高木・向田[2008]によれば、同藩が危機意識をもって対処した2度目の仕法書だった。この仕法は仙台藩の施策と連動したもので、荒廃田の再開発 所得向上 間引き防止を図り、その「果実」として出産増・人口回復を見込んだ(高木[2011a])。



〔図版1「嘉永五年育子方御用留」〕

それ故、この文書は権力の強い決意を感じさせる内容もち、翻刻の価値があると判断した（以下、図版1の翻刻文を掲載）

「嘉永五子年七月廿八日 於會席御家老中左之通被仰渡、依而慎濟館係り之衆中へ及吹聴、係り月番より慎濟館江伝達首尾相成

— 沼田友之助
中井五左衛門

慎濟館係り被仰付候御引立之義八、兼而御沙汰之通相心得可相勤候、且育子方之義二付而者 御直書ヲ以被 仰出、同館江も別而御沙汰之通二付而八、御醫師中より存念書も差出候二付、夫々御吟味之上御取行相成御取調二有之候、依而 思召を以右係り被 仰付候事二候間、右存念書二而取捨折入吟味相尽可申出、尤以後共二育子之義二付、御醫師中申出も有之候ハ、其時二入念吟味可申出候（以省略）

注）慎濟館は一関藩の醫師養成校、御引立は藩の仕法・賑民政策、存念書は藩諮問への意見書である。

一関藩は慎濟館で、村醫師（村々に居住、漢方治療のかたわら墮胎を請負った）を再教育し、「弊風」矯正を目指した。この事実は、

村々に居住した赤子制導役は、3ヶ月毎に妊娠を記録、出産までを見届け結果を懐婦書上に記帳したが、彼らは墮胎・間引きの抑止力を欠いた、ということを示している。

天保飢饉（1831年）が藩人口に与えたダメージは、9~10万人減と推計される（高木・新屋 2012）。しかしその後の急速な回復は、例えば一関藩のこうした賑民政策の効果（最大に見積もって20%程度）ではなく、幕末の体制崩壊を目前にした庶民が、抑圧体制からの解放と生活水準向上の期待とを確信したからである。この事実は、現代先進国に共通する未婚、非婚、少子化にとって、示唆的である。

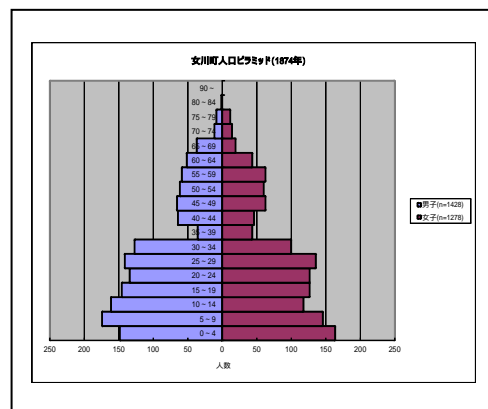
（2）：研究目的（4）に対応した成果。

予備研究：江戸時代の超高齢者数（人口10万人比人数）。江戸期の超高齢者は、これを仮に「数え年80歳以上者」と定義した場合、何人程度生存しており、人口10万人比では何人くらいだったか。予備研究として、手近な数値を利用し計算をした。

まず日本の現状は、平成22（2010）年国勢調査によれば、男・女総人数に対する80歳以上者は、男子274/6,233万人、女子539/6,573万人（性比94.8）、人口10万人比4,396人、8,200人（男女込みで6,349人）である。

次に江戸期の現状は、これは部分人口であるが、例えば宮城県牡鹿郡女川町の明治7（1874）年・年齢階層別人口は、江戸期の構造を保持していると仮定すると、80歳以上者は、男子1/1,428人、女子0/1,278人（性比111.7）、10万人比70人、0人（男女込みで37人）であり、全ての数値は現在と逆になった（女川町誌編さん委員会 [1991:540]）。

なお女川の人口ピラミッド（下図）は、35-39歳層で極端な「くびれ」が（40-44歳層を含めて）ある。これは35-37年前の天保飢饉が残した傷跡である。



〔図版2 宮城県女川町：明治7年〕

江戸時代の超高齢者資料。江戸時代の大名（藩主）は、儒学を基礎に武家と庶民を統治

した。彼らは清朝以前の歴代皇帝の「養老の礼」に倣い、孝養思想をみずから体現した。体現方法は、高齢者・孝子・節婦を調査させる、領内出馬の折り呼び寄せる、居城に招き「御目見」をする、などして褒賞・酒肴を与えることだった。



〔図版3「八十歳以上男女老人調」〕

例えば上図は、仙台藩の調査指示に応じて作成された、村方の嘉永2(1849)年老人書上である(岩山家文書)。ここには、新沼村に80歳以上者が3人いる、と記している。

「 新沼村
 吉親 作四郎八十歳
 吉五郎母 屋ん八十歳
 長作祖父 養蔵八十五
 合三人 」

こうしてわれわれは、藩文書・地方文書が良好に保存されている場合、文中から超高齢者に関わる情報(戸主名、続柄、老人の名前・年齢・性別・单身/有配宮の別、家族形態、階層、処遇状況など)を取得できる。筆者は、この視点で藩文書を検索した結果、仙台藩文書と岡山藩文書が妥当と判断した。

研究成果：その一部を以下に記す。仙台藩は嘉永2(1849)年、領内(数え年)80歳以上者の書出しを命じた。これに該当する百姓は、2,615人(男子1,300人、女子1,315人)だった(中目家文書)。当年の百姓総数は461,808人(推計値)であるから、男女込みの人口10万人比は556人(現代日本では、に記したように、男女込みで6,341人)である。

岡山藩は元禄8(1695)年、家中70歳以上者を書出したが、その数743人(男子331人、女子412人)、うち80歳以上者163人(男子

73人、女子90人、性比81.1)を計上した(「元禄八乙亥歳七十歳以上之書上」池田文庫)。この年の家中総人数は未入手だから、彼らの10万人比人数、性比は計算できない。しかし、西日本の武家社会は近世中期から、女子は男子より長寿・長命だった(つまり、現代とあまり変わらなかった)可能性がある、という結果だった。

なお、ここ(研究成果の記述)で言及した文献(「主な発表論文等」以外)は、以下の通りである。

高木正朗・新屋均[2008]「東北諸藩の人口趨勢 仙台藩郡方・一関藩村方人口200年の復元」高木編『18・19世紀の人口変動と地域・村・家族 歴史人口学の課題と方法』古今書院。

高木正朗・向田徳子[2008]「人口減少と民政の展開 一関藩「仕法」と狐禅寺村の対応」高木編、同上書。

木下太[2002]『近代化以前の日本の人口と家族』ミネルヴァ書房。

女川町誌編さん委員会[1991]『女川町誌(続編)』宮城県女川町。

S.B. Hanley and K. Yamamura [1977] *Economy and demographic change in preindustrial Japan, 1600-1868*. Princeton UP.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

高木正朗・新屋均、飢饉と人口変動 天保期・仙台藩の「郡方」「村方」人口推計、立命館産業社会論集、査読：無、48巻1号、2012、1-22。

小野寺健・高木正朗、17世紀中期の人口・住民移動調査 仙台藩・初期「人数改帳」の年次特定、立命館産業社会論集、査読：無、47巻3号、2011、1-18。

高木正朗、19世紀中期の人口増加と「稲作前線」の回復 仙台藩・中奥農村の「家屋敷」再興計画、立命館産業社会論集、査読：無、47巻2号、2011、1-26。

〔図書〕(計1件)

高木正朗、立命館大学人文科学研究所SDDMA研究会、陸奥国仙台藩領内旧村古文書目録〔 〕、2012、1-108。

6. 研究組織

(1)研究代表者

高木 正朗 (TAKAGI MASAO)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70118371